

# 会 報

1982

No. 14



ツェルムカン (標高 6935m)  
とブルー・シープ



## 神戸山岳会

# 目 次

前田浩氏事故経過報告 .....	松 本 行 雄 .....	1
前田 浩氏の御逝去を悼む		
命の恩人 — 浩君 .....	木 村 寅次郎 .....	7
前田浩君の思い出(一枚の写真によせて) .....	片 山 英 一 .....	9
雪山用のテント .....	島 田 文 雄 .....	11
追        悼 .....	新 川 利 夫 .....	12
これからの山岳会 .....	内 藤 正 司 .....	13
前田浩氏の略歴 .....		14
昭和57年度総会 .....		16
臨時総会 .....		16
昭和57年度夏山合宿 .....		17
合宿の概要 .....		17
A班行動記録 .....	小 林 利 樹 .....	17
夏山合宿 .....	迫 田 哲 郎 .....	18
夏山合宿に参加して .....	広 池 義 則 .....	19
B班行動記録 .....	国 沢 昭 美 .....	21
夏山合宿(CLとして) .....	幸 内 義 孝 .....	23
初めての夏山合宿 .....	大 西 章 代 .....	23
昭和57年度個人山行 .....		25
氷ノ山スキーツアー .....	山 内 教 史 .....	25
乗鞍岳スキーツアー .....	吉 田 典 夫 .....	26
明星山P6南壁マニフェストルート .....	山 内 教 史 .....	27
S E X Y クラック .....	山 内 教 史 .....	29
穂高麓谷 .....	小 林 利 樹 .....	33
小西 正宏君遭難 .....		35
遭難に思う .....	内 藤 正 司 .....	35
小西君の行動記録 .....		36
第1回捜索 .....	迫 田 哲 郎 .....	36
第2回捜索 .....	内 藤 正 司 .....	38
第3回捜索 .....	山 本 泰 彦 .....	38
遺体発見の知らせを聞いて .....	星 野 辰 他 .....	39
OBの立場より .....	米 沢 典 之 .....	40
小西 正宏君と僕 .....	幸 内 義 孝 .....	41

(表紙写真 1980.11.5 故前田浩氏撮影 プータン王国にて)

# 前田浩氏事故経過報告

兵庫県山岳連盟副理事長

松本行雄

10月26日に小川さんから、「KAC会報を発行する。来月6日の追悼会に間に合わしたい。経過報告は松本に書いて欲しい」との電話が入った。

書くのが当然である。筆は進まず心が痛むが、それが私の責務というものであろう。

お通夜の席上、涙ながらに御報告申上げたことを、そしてもっと詳しく更めて文字にした、と受取って頂きたい。

昭和57年8月30日の兵庫県山岳連盟運営委員会の席上、「全国登山研修施設協議会」が、富山県中新川郡立山町千寿ヶ原、文部省登山研修所に於いて開かれる。主たる議題は、「登山研修施設の主催・共催事業に於ける、山岳事故（死者）発生後の対応について」であると発表され、岳連の副会長であり、研修所の所長である前田さんと私が参加することに決定をみた。そして9月の上旬だったと思うが、前田さんが王子スポーツセンター（私の職場）へひょっこり見えられた。神戸登山研修所は、王子スポーツセンター15施設のうちの一つであり、運営管理は兵岳連に委託されている施設である。

「剣に登ってこようと思っているが、あんた行かへんか、どないや」

と誘いを受けた。飲むこと、遊ぶことの誘惑には必ず負けることにしている私に否やのあるはずはなく、すぐにOKしたが、前田さんはすでに時刻表も持って来ておられ、直ちに計画はでき上がった。

昭和57年9月21日（火） 曇後小雨

午後より文登研で会議を開く。参加団体は、文部省登山研修所・長野県山岳総合センター・神奈川県丹沢登山訓練所・滋賀県立比良山岳センター（今回より参加）及び神戸登山研修所の5者であった。

同夜は文登研の盛大な歓待を受けたが、顔馴染みの多い前田さんは、スイスへ家族と旅行し

たときのこと。剣登山は中学の頃が初めてで、今回が50周年目であることを、たいへんご機嫌で、非常に嬉しそうに話しておられた。事故後、文登研の佐伯さんは、

「その話は4回ぐらい聞きました」と話していた。

9月22日(水)快晴 15時頃より曇、気温高し。

8:00 文登研の車で室堂へ移動し、現地視察ののち、10:00 解散となる。

10:05 前田さんと私は、立山三山の縦走に入る。いつものことながら、前田さんのリュックは重い。水筒・缶詰・弁当等重いものは全部私の方に入れる。そして私が先頭に立つことにし、しばしば休憩するようにする。

11:10一ノ越 11:25

12:35 雄山神社 13:00

14:40 真砂岳 15:00

前田さんは愛用のカメラで、盛んにシャッターを切る。

休憩の度に、よその女の子などに、

「50周年記念や、その頃は千垣から歩いたんやで」

とご機嫌である。

「前田さん、その頃は編上靴にゲートルですか?」と聞くと

「いや、ナーゲルを持っとった」

と、これはご自慢の一つである。

15:55 剣御前小屋着。松葉杖を持った右脚上腿切断の青年が、サポートの青年と共に三山縦走をやっており、この2人と同室になったので、4人でビールで乾杯。明日、初めて奥大日岳へ登るというので、励ましの言葉を加えつつ、詳しくルート説明をしておられた。

17:30 夕食

21:00 就寝

9月23日(木・祝)

夜中に快晴、富山平野の灯、沖のいか釣りの灯等が明瞭に見える。

5:00 起床 高曇り 視界良好 風なし 気温高し。

「前田さん、雨になるかも知れませんね。下りますか?」というと、

「いや、登ろう。雨になったらそのときバックや」

と張り切っておられる。

朝食後6：10 御前小屋発。昨日と同じく私がトップに立ち、前田さんの荷はできるだけ軽くするようにした。

劔御前の東の腹を巻くトラバースルートを行く。

7：35 前劔の基部

8：35 前劔頂上

薬師岳方面が雨の様子なので、本峰登山はとりやめ下ることにする。

9：00 下山開始

9：15 頃より小雨

9：27 前劔の基部。雨具をつけ、リュックにビニール袋をかぶせたり一服吸ったりする。

一服劔等コブを三つ程越え、クロユリのコルから劔御前のトラバースルートに入る。雨が少し強くなってくる。

左下約300m~400mに劔山荘、右下約600m~700m沢の底の感じで劔沢小屋が見える処、大きな石のガラ場から約30mの地点、傾斜は弱登りの比較的平坦なルート上で、事故は発生した。

私と前田さんとの距離は6~7mであったが、後から、

「シンドイナ」

という声が聞こえ、私も、

「シンドイですね、休みましょうか」

と止まる。汗を拭いたりして、ふと振り返ると、前田さんはしゃがみ込んで膝をつき、嘔吐するような感じで体を動かしている。私はてっきり、『あら、調子が悪いのかな、あげているのかな』と思った。

前田さんの震えはすぐに収まった。帰神後その情景を再考したが、10~15秒程度だと思う。

震えが収っても姿勢を変えないので、

「調子、悪いのですか？」

と覗き込み手を掛けたが、返事とか体を動かすとかの反応が無い。私は慌てた。

「前田さん、前田さん、しっかりして、どないしたんや、しっかりして」

と連呼しつつ抱き起こし、体をゆすったり頬をたたいたりするが、まるで寝ている子供を抱いたような状態で、全く反応がない。そして呼吸をしていない。

『これはえらいことになった／早く酸素を！』

と思い、道に上向きに寝かし、右側面から直ちにマウス ツー マウスの人工呼吸をする。そして、脈拍を探るも、停止しているのか、微弱なのか、私自身動転しているし全然判らない。雨が降っているので、胸を開けるわけにもいかない。シャツの上から耳を押しつけても、全く心搏は判らない。

髪の毛のそそけ立つような思いで、心臓マッサージとマウス ツー マウスを交互に繰り返す。

途中、時計を見ると10:35であった。事故発生は、おそらく10:20頃ではなかったか?と思う。

雨は粛々と降っているし、人っ子一人通らない。しばらく続けていると、上から1人登山者が来たので、劔山荘に搬送用具と人手の応援を依頼する。

瞳孔を見ると開いている。しかし死なせてなるものかと、人呼と心マを続ける。11:00ぐらいと思うが、劔山荘の従業員の黒田昌行さんと久保直子さん(看護婦)が来てくれ、3人で人呼と心マを続ける。

私は、劔山荘に収容してくれるようお願いをする。そして劔沢・雷鳥沢・室堂までどうして運ぶか、今日中にできるのか、明日いっぱいかかるのか、医師にはどこで会えるのか、と思いつつ悩む。

やがて、山岳警備隊1名と劔沢小屋・劔山荘から7~8名、登山者2名が応援に来てくれた。

11:40頃、警備隊員と看護婦さんの判断で、死亡と推定される。

その間、劔山荘の電話で→警備隊→上市署のルートで、ヘリコプターが来てくれることが判る。

<ヘリコプターの状況>

昨年11月、池谷で丹沢山岳会(神奈川岳連)が3名雪崩で死亡。うち1名は57年8月に収容、このたび残りの2名を発見し収容中で、このヘリが来てくれた。

劔山荘から持って来てくれた毛布にお包みし、ヘリの着陸地点へ搬送する。着地点は劔山荘の上方、やや平らかな草つきの処である。

12:25頃ヘリ到着、前部座席には操縦士と警察官、後部座席に前田さんを寝かし、私はそれにしがみついで確保する。地上の人たちには機上より、両手を合わせてお礼の気持ちを表す。押さえようもなく涙が溢れ出る。

12:30頃フライト、馬場島へ下る。馬場島の川原が収容基地になっていた。

遅い警察官が、小走りに前田さんを運ぶので、脚部を持っていた私は石につまずき、前田さんの上へ大きく一回転、川原の石へたたきつけられる。

馬場島で、上市警察署外勤課 日下昭巡查部長から事情聴取を受ける。日下さんはたいへんていねいな方であったし、親切にアドバイスしてくれる。彼は、市役所山岳部のメンバーが薬師岳で遭難死したとき、世話になった佐伯文蔵氏・英次氏等と親戚だった。

私は神戸への連絡をあせるが、公衆電話が一本だけであり、警察の専用の状態で使用できない。警察は警察で、池谷の状況と、突発した我が方の事故の把握でテンヤワンヤのありさまである。

上市で検視のある旨、検視が済めば家族に、この場合は私に引渡す旨言われる。あるいは、警察医の判断によっては、解剖に付されるかも判らないと言われ、必死で『そのようなことがないよう、早期に家族に引渡してくれるよう、口添えして下さい』と頼む。

13:30頃、日下部長が、文登研の東庶務係長の自宅に電話を入れてくれた結果、畔田専門職員と通話が可能となり、神戸登山研修の三子さんに通知を依頼することができた。上市町で検視と一口に言うが、例えば警察署であるのか、病院なのか、公会堂なのかさっぱり判らない。私と神戸との通話は不可能と思ったので、不明点は神戸から富山県警、または上市署へ電話を入れるようお願いする。

時間経過と共に、『松本から一言も神戸へ言ってこない、けしからん！』と思われまいかと、ヤキモキしてくる。

毛布のまま引渡しを受けてはたいへんだと思い、納棺と適当なお寺への収容を、日下部長にお願いする。

14:40頃、畔田さんが馬場島荘へ来てくれる。

14:50頃、馬場島から上市へ遺体3体が移送される。私は、畔田さんの車で上市へ移動する。車中、15:00のニュースで事故が発表された。

16:00、上市町の専徳寺で検視が行われ、前田さんの引渡しを受ける。丹沢の方たちに手伝ってもらい、直ちにかたびらに着せかえ、納棺する。

お寺の本堂にはお棺が三つ並び、丹沢のおふた方は直ちにお葬式が行われたので、これに臨席する。

文登研から、畔田・柳沢・東・佐伯の皆さん方が詰めて下さり、ありがたかった。

私は、湯上慶祥御住職に、家族が来られるまで御遺体を寺に置いてくれるよう頼む。

私は、神戸へどうして運ぶのか、飛行機なら小松とのこと。小松はどっちの方向なのか、何kmあるのか、どんな梱包にするのか、誰がするのか、誰に運んでもらえばよいのか。自動車はどうか、霊柩車なら何十万円もかかる。するとどんな車種か、何処で借りるのか、果たして貸してくれるのか、上市か富山かと思いつく。

16:30、川崎理事長からの電話で、奥さんと藤田博さんとが、17:10神戸発、21:05富山着で来られるとのこと。移送用の車は、神戸から持って行くとの連絡を受ける。少しホッとする。

21:05、畔田さんの車で、奥さん、藤田さんを富山駅に出迎える。事故当時の状況を説明する。3名お寺で泊めてもらう。

24:00、神戸から、車到着する。

9月24日(金)

9:00 法要ののち、車は神戸へ向かう。

9:15 奥さん、藤田さん、私とで現地で世話になった方々への処理を一切済ませます。佐伯さんが車でサポートしてくれる。

10:05 電車で3名帰神する。

16:30 前田さん宅へ帰着。

18:30 お通夜、状況報告をする。

以上で経過報告を終わるが、振り返ってみると、昭和26年神戸市役所山岳部創設以来のお付き合いであったが、これ程深い影響を私に与えてくれた人はいない。私の半生のお師匠さんであった。山の先輩であり、人間はいかに生きるべきかを、何と多く教えてくれたことか。

KACとは、「六甲ハイキング 大西雄一氏著 創元社刊」の実地調査を共にしたことがあり、オリエンタルで祝賀会を催したりしたが、その橋渡しをしてくれたのも前田さんである。その他30年間のお付き合いの数々が思い出されてならない。

事故に臨み、最善を尽した積りではあるが、何かもっと方法がなかったかと悔まれてならない。私がついておりながら、このようなことになってしまい、残念で残念でならない。KACの皆さんにも、済まない、という気持ちで一杯である。

今は只、在天の御霊の安らかならんことを、御祈念申上げるのみである。

(神戸市役所山岳部・神戸市立王子スポーツセンター所長)



## 前田 浩氏の御逝去を悼む



ありし日の前田浩氏（昭和57年6月16日、マッターホルンを背にスネガー  
2300Mにて）

### 命の恩人－浩君

木村 寅次郎

浩さん！ 浩さん！！ 君は何故逝つたのか、あれ程慎重な上にも慎重な山行を重ねて来た君が、北アルプスの剣岳で逝つてしまうとは、本当に夢のようで、呆然自失の外なく、9月23日午後1時30分頃、妹さんより「今日午前10時35分、剣岳で兄がなくなりました。」の電話で訃報を受けた時のショックは、肉親の死去以上に、命の恩人がなくなった。あっとうしようもなく身体の震えが止らず、自分の耳を疑ったものゝ、瞬時に想いは昭和11年8月18日午前8時頃、君と共に北穂高滝谷側第4尾根での転落事故の一瞬が走馬灯の如く頭の中を走り、「あゝ俺は助かった！」と叫び、君の上方から「大丈夫か！」と云う声が、岩々に届して耳に達した。私は伸び切った40mのザイルに吊ぶらりとなり、二人は両端に固く結ばれていたのです。あの時君の完全なビレーが無かったら、当然私はあの世へ旅立っていたのです。その時私は良い友、いや良い兄弟と云う気持が一杯で、急に元気を取戻しました。あの時の君の沈着な行動は、神の如く、仏の如く、崇高なまで見えてなりませんでした。君の蒼白の顔

面に血が流れ、腕はザイルの摩擦の焼跡が残り、私は左右のカガトを打ち、これではとても駄目と、登攀を断念し、C沢をコルまで引返し、涸沢のテントで一泊。翌日徳沢まで下り、又一泊し、次の日神戸に着きました。それ以来、私は君を「命の恩人」として終生忘れることなく君への感謝の気持を常日頃より心におさめ、戦前はもちろん、日支事変応召中の北支でも一日とて忘れる事なく、私の人生の続く限り感謝の気持で毎日を過して来ましたが……。

よもや君が私より先に山で逝こうとは夢にも思いませんでした。今まで何一つご恩返しも出来ず誠に申し訳ない思いで、胸が一杯になりつかえて何んともペンが前に走らなくなりました。

顧みれば、昭和4年4月県商入学、昭和5年山岳部に入部以来数え切れぬ程の山行を共にし、殊に昭和8年(当時17才)で、北鎌尾根に登攀された時には神戸の山岳界でも、中学生が北鎌をやったというので話題になった程でした。その後「嶺同人」のグループの一員として大変活躍され、八ヶ岳、剣、穂高、槍、後立山など山行を共にし、戦後は「神戸山岳会」の創設に全力を傾注され、若い岳人の育成に大変努力され、持前のガンバリを見せ、兵庫県山岳連盟の最右翼として東奔西走され、君の息のかゝつていない山男はいないのではないと云つても過言ではありません。

君と私は、山で結ばれた友と云うだけでなく、私達夫妻、子供、孫までも家族の一員の様な深い深い結びつきとなり、これから先、いついつまでも、と願っていましたのに、君が尊い命を亡された事は、私達だけの悲しみでなく、神戸の山岳界においても計り知れない大打撃と思ひ、残念で残念でなりません。

最後に 浩さん！ 泰普浩山禅定門様のご冥福を祈りつつペンをおきます。

合 掌

## 前 田 浩 君 の 思 い 出

(一枚の写真によせて)

片 山 英 一

一枚の古い写真がある。昭和二十八年の一月、雪の上高地の朝である。帝国ホテルのまだ今の姿に建てかえられる前のあの古い格式のある木造の部屋の窓を背景に、好天に恵まれた明るい日ざしを一杯に浴び、山へ向つて出発する直前の一枚でひよつとしたら「上高地の大將」帝国ホテルの木村 殖さんにシャッターを押してもらつたものかも知れない。

此の年の正月を前田君と私の二人で上高地で暮そうと計画し元旦の夜から例のすしづめの夜

行列車で、早朝松本まで辿りつき島々の駅前でバスを待つ。沢渡まで入ってくれたらと祈るような気持で乗りこんだバスであつたが、無惨にも奈川渡の手前でおろされ、早速スキーを担いでの難行がはじまった。沢渡からスキーをはいて今日は中の湯までのつもりで雪道に歩を運んでいたら、坂巻温泉へ入る吊橋の向う岸のたもとに立っていた宿のおばあさんに、泊つていつくれと呼び込まれた。晩酌一本サービスするからと言うのにつられた格好となった。坂巻の湯は良いお湯で、ひなびた湯槽も又格別であった。二人の晩酌は一本から二本、三本と重ね、前夜からの疲れで前後不覚にねむってしまった。翌日釜トンネルをぬけ大正池の畔をつたつて上高地の木村さんの小屋へ入ったが、良いお天気であった。帝国ホテルの木村さんとは昭和十年以来の親しいおつき合い。背負つて来た灘の生一本を献上すると相好をくずしての大喜びであつた。一日を休養と偵察をかねて河童橋から岳沢の中ほど位まで散歩しゆつくりした。翌日、好天を見定めて払曉に小屋を発ち岳沢から天狗沢をつめ天狗の科尔へと向った。出発が予定より一時間ばかりおくれたのが祟って、岳沢の上部全面に朝日が当り出すとまたたく間に雪の表面がゆるみ出し、スキーをデポしたあとのアイゼンにワカンジキの足はひどくもぐりはじめ、科尔の直下の急斜面では腰までもぐり、息ばかり切れてさっぱり前進出来なくなってしまった。やっとの思いで科尔へ這い上つたのはもうお昼近くになっており、随分時間をくつた上にすつかりへばってしまった。稜線でザイルをつけジャンダルムへ向って岩稜を辿った。ジャンダルムの頭へ登りついた頃には短い冬の陽はもう西へ傾いていて日没の近さを示していた。ロバの耳の下りにかかり、飛驒側をトラバースして岳沢側へ出、扇沢の真上へつき出した雪の棚の上でビバークすることにする。何本もハーケンを打ち込みザイルで体を吊り下げないようにしてツェルトザックをかぶり寝仕度をし、まず湿った靴下をはきかえる。凍りついたアイゼンをほどき、オーバーシューズをぬいでくつ下をはきかえる作業はやっかいで大変だったが、これは前田君の強い命令でやむを得ずやられた。焼いて腹巻きに包んでもって来た餅を煮き夕食にした。身体は温まつて来たが、ツェルトの内側は湯気でくもり水滴がたまり、それがすぐに凍りついたり、あまり居住性は良くない。足もとは岳沢から扇沢を吹き上げてくる突風であおられ、ツェルトの裾から粉雪が舞い込んでくる。お天気はすごく良くすき間からのぞくと塩尻の街の灯がチカチカとまたたき物悲しい程に美しかった。冷えて来て身体のおちこちが冷たく私は殆んどねむれなかつたが、前田君は良いいびきをかいて気持ちよさそうにねむりこんでいて、羨しい思いの一夜であった。零下二十五度位にまで冷えていた。美しい夜明けであった。又餅を煮いて朝食にした。南東の方向に富士山が雲の上にヌッと頭を出して、その向うに朝日が昇ろうとしている。雲の色が美しく刻々と早暁の光の中で多彩に色をかえてゆく。あの富士山の肩に太陽が顔を出し輝やかな金色の光を放つ得難い瞬間を一枚撮っておこうと、カメラをかまえて待ちうけた。実はそんなことで朝の出発がおくれたことがとんだ苦労のはじまり

となってしまった。ここから奥穂高岳頂上への氷のナイフリッジは緊張させられた。頂上へ辿りついた直後から天候は急変し、濃い乳色の霧につつまれ視野は全く効かず、奥穂の小屋まで下りて来た頃、涸沢から吹き上げる突風は氷雪の破片を激しく顔面に叩きつけ息も止まる思い、涙があふれ出て眼をあけていられない。涸沢への下り口が見つからない。足もとから崩れ落ちる雪のブロックの転がった跡をまっすぐに、下半身を雪に埋めたまま谷の底をめがけて一直線に下ってゆく。悪戦苦闘の末、涸沢から横尾の本谷に入り、深い雪に足をとられ乍ら岩小屋へ到着した頃は、すでに日も暮れてしまっていた。猛吹雪と突風の中で昼食もとれずに歩きつづけた。岩小屋で残っていた餅を煮いて腹拵えをしランプの光をたよりに梓川の河原を徳沢小屋めざして歩き出した。よほど歩いた頃新しいアイゼンのツアッケの跡を見出し、ホッと一安心してたんねんにその足跡をついて行くと、何と、元の岩小屋の前へ出てしまった。横尾の本谷と梓川の出合の広い三角型の河原をグルリと大きくリングワンデリングをやっていたのだった。がっかりして岩小屋に腰を下ろし紅茶を湧かして一息入れた。今度は慎重に時々露出している流れを見つけては雪の塊りを流してみても下流を確かめつつ、真暗い川すじの積雪の上を足探りで、あしたの朝までに行きつけければ良いとゆっくり気楽に歩きつづけた。ふと左手に夏道を見つけて踏み込んでみた。樹間の雪道を見失しなわないよう一足、一足たんねんにたどってゆくと突然木立ちがひらけて徳沢の小屋の前へ出た。窓からランプの灯りがこぼれていた。助ったと腰がくだけるような疲れが一どきにどつと吹き出した。

私達と一緒に上高地へ入山して、一足先に徳沢入りをしていた関西登高会のメンバーのリー



片山英一氏と共に（昭和28年1月 上高地にて）

ダー、浅野君が起きて来てくれ、いろいろの火を焚きつけて呉れた上、床下の物置きから、凍らないように囲っていたビールを取り出して来てくれた。燃え上った槽火に頬をほてらせ乍ら一息に飲み干したそのビールのおいしかったこと。二人はお互いのコップにつぐ間もまどろしく何杯も一気に喉に注ぎこんで、炉端にそのまま、棒のように転ってねむりこんでしまった。上

高地へ帰ると木村さんが出迎えてくれて、まあベテランの二人のことだから間違いないとは思っていたが、今夜帰って来なかったら明日は徳沢へ使いを出してみようかと思っていた処だったと。早速「まあ一杯やろうや」と酒になった。

## 雪山用のテント

島田文雄

岳友故前田 浩君と知り合ったのは、神戸山岳会の前身の「嶺同人」時代で、昭和10年頃だったと思う。なにしろ古い事なので定かでない。もっとも、太平洋戦争の戦災で記録や写真を失なう事がなかったら、正確な山行記や、当時の様子をお伝え出来るのだが、残念でならない。

今の登山では、冬山の雪中テント生活はあたりまえの事であるが、その当時に、京大山岳部の白頭山を中心にした、長白山脈（現在の朝鮮民主主義共和国の北部）の冬期間にテントで生活を続けながら、縦走に成功した事が報道された。それまでは、冬期においては、山小屋を中心にしての行動しか考えていなかった吾々は、大いに刺激された。嶺同人も、早速これを手本に、より高度な雪中登山に挑むべく研究することになった。先づ冬期用のテントの購入計画をたてたが、当時は、冬期用のテントに関する資料は乏しく、参考文献や、資料の蒐集は困難であった。岩や氷を登ることばかり考えていた吾々は、余り資料集めの手伝いはしなかったと思うが、それでも前田君は一人でコツコツと資料集めに努力してくれた。同君の努力の結晶を検討した結果、いよいよテントを購入することになり、当時、RCCの島田真之助氏が経営する好日山荘へ発注したが、なにしろ若者ばかりで、資金が少なく、前田君が県商で鍛えられた財政的な手腕を発揮して、島田真氏に交渉の結果、遂にカマボコ型、簾支柱、二重張り（表は綿紡布地、裏は密度の細かい金巾）、底付のテントが出来上り、吾々のものになった。

昭和13年だったと思うが、正月の合宿で猿倉の小屋を根拠として、前田、馬場、島田の三名で、杓子頂上を目指す計画をたてた。支援隊の応援を得て、重いテントを尾根の取付きから少し上部まで担ぎ上げ幕営、翌日は猛吹雪で滞在、初めての雪中生活にもかかわらず快適であった。夜間に暖をランタンでとったのは大失敗で、翌朝三名が顔を見合わせ、鼻の穴から周囲がローソクの煤で真黒くなり、吐き出す痰まで黒かったのには驚いた。二日目は雪も止み、星も見え出したので、時間も分らぬまま、ワカンを付け登攀開始、昨日のドカ雪を掻き分けながら、いくら登っても夜が明けぬ、それもそのはず、昨日以来テントの天井に腕時計を吊下げて置いた為、炊事の水蒸気が凍り付き、時計が狂っていた。4時頃と思って出発したのだが、実際は真夜中の1時頃だったことが後でわかった。三人交代でラツセルに次ぐラツセルで前進

したが、島田がラッセルする時は胸位いまでしかもぐらぬのに、目方の重い前田君は首位いまでもぐり、悪戦苦闘していた様子が今でも思出される。ラッセルに時間を取られ、頂上近くまで頑張りが、時間切れで余儀なく退却しなければならなかったのは心残りだった。白馬大雪溪を見下すと、別動隊の片山君等の一行が、気持ち良さそうにスキーで降って行くのが望まれ、うらやましく思った。その日もテント泊り、この三日間の雪中生活で色々な事を体験した。コッヘル一杯に水を作るに要する時間とか、米を洗わずに炊いて、いかに旨く食べる料理等々。

その後、このテントは、冬期の伯耆大山や八ヶ岳等の合宿でも大活躍している。吾々に新しい冬期登山方法を開拓してくれたのも、前田君の努力と勉強の賜物だと思って居ります。

この古くて重い想出のテントも、恐らく戦災でなくなった事でしょう。たとえ、それが残っていても、軽くて丈夫な合成繊維のテントが重宝がられている昨今では、誰からも見向かれないと思います。しかし、苦心して作り、実際に使ってみて、色々な貴重な冬山の体験を得ることが出来た事は、若かりし頃の前田君の努力の成果であったと今でも思って居ります。

拙いこの文章を、故前田 浩君の霊前に捧げ、ご冥福を祈ります。 合掌

## 追 悼

新 川 利 夫

9月23日前田さんの訃報を受けた時、余りにも突然な事ではばらくは信用する事が出来ず何度も問い質した程であった。早速三ノ宮の家に駆け付けて事情を聞く内に悲しみが徐々に浸透して行くのを押える事が出来なかった。

思へば先輩として山を通じて知合って以来家族的にも永い御付合をさせてもらい、それも何時も御世話になる事ばかりでした。

前田さんを知ったのは確か昭和13年頃道場不動岩のトレーニングが最初であったと思います。故青木先輩、前田、馬場、島田さん等の中にただ一人混ってしごかれ山への思慕を益々燃やしたものでした。その後の前田さんの厳しい中にも吾々の至らぬ所を温く包み込んでくれる統率力の数々を教えてもらいました。あの戦後の劔穂高の夏山合宿に於て大勢の玉石混交のパーティーを統率され成功させられた事や白馬猿倉の雪山合宿で吹雪の中で雪洞を掘った時、ともすれば良い加減に掘ってもぐり込もうとする吾々を「ピバークと違う。此処で生活するんだもつとガッチリとやれ」と叱咤され真白になって掘った御陰で他の雪洞組と違い天井沈下もせず長期の使用が出来た事もありました。亦35年頃より続いた正月の鉢伏山家族スキー行では何時も乍ら御世話をして戴き、例年の家族の楽しみになった事も自分では出来ない前田さんの献身的な心の大きさを教えられました。

35年2月前田さんと木村次郎君とで扇ノ山に行った時、日が暮れて岩井温泉にたどり着いたが吾々の風体を見て「満員だ」と拒まれた。「風呂だけでも入れてもらおう、おいカメラか時計を出せ」と云って持って居たローライ、ライカー、ニコンにインターナショナル、オメガ、ローレックスを帳場に預け風呂に入ってから「まあ見てみ何とかなるさ」と悠々と上って見ると、立派な部屋に案内され番頭が出て来たので「大体やなあ、お前ら人を見る目がないで」と例の調子で大いに溜飲を下げた事がありました。酒が入るにつれて談論風発「但馬の本を出そう」という事になり思へばあの時「但馬をめぐる山々」の原点が出来たと思います。その後も酒が入ると良くその時の事を云って懐しい思い出にひたったものでした。「但馬をめぐる山々」の編集過程に於て小生の外国勤務や東京勤務等でお手伝いも出来ぬ内に前田さんを頂点とする当時の会員諸兄の努力で立派な本が完成し、それを手にした時は本当にうれしかった事でした。

その後前田さんも大きく神戸山岳会を離れ岳連関係の仕事をされたので忙しく一緒に山へ行く機会が少くなりましたが50年9月の雨飾山が最後でした。

今年の夏、ヨーロッパに出発する前に電話を受け「スイスで一番良かった所は何処やった？」と聞かれたので「もう大分前の事だがウェンゲンが静かでのんびりして居た」と電話で種々話をしました。その後帰ってからウェンゲンは良かった。写真を整理したら見に来てくれと便りももらったが、何れその内にと思い乍らそれも果す事が出来なかったのは今にして思へば非常に残念な事でした。前田さんのお宅が三宮の便利な場所故、毎日通り乍ら何時でも会える何時でもまたお世話してもらえると云う心の勝手さが遂にこんなはかない別れになってしまうなんて想像もし得なかったと慙愧の涙を止める事が出来ません。前田さん何とぞ安らかに眠られん事を！！

## これからの山岳会

内 藤 正 司

ここに会員一同、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

さて、これから先神戸山岳会が直面している諸問題をひとつひとつ解決していくために、会員諸君には一層より良い会を作り上げる協力を、精神的及び体的に求めるしだいです。

振り返ってみると、すべての会の運営は、前田さん一人に余りにも頼りすぎ、この様な出来事が起り、いかに我々が甘え又ルーズであったかが今この時点で思い知らされています。

山登りを深く追求すると、アルピニズム感又、それを行動するアルピニストは高度な山行を目指す。そうすれば自ずから、会組織の重要性を深く感じるであろう。言いかえれば自分の山行の基盤である会を無視する事は出来ない。あえて無視すれば、その山行は虚しさを味わうであろう。会を大切に考え、自分自身の山行に自信があれば、より高度な山行を思いつき出来ると

思う。その為にも、会を発展させる協力が各自大切である。されど会自体も現実に即さなければすべて夢物語に終わってしまう。

「一つの時代が幕を下した」そんな感じの今、皆の協力で神戸山岳会発展の為、くれぐれもよろしく願い申し上げます。

合 掌

## 前 田 浩 氏 の 略 歴

- |             |                                |
|-------------|--------------------------------|
| 大正 5年10月13日 | 神戸市灘区篠原に父弥一郎、母たかの長男として生れる。     |
| 昭和 4年 3月    | 神戸市立六甲小学校卒業                    |
| 〃 4年 4月     | 兵庫県立第一神戸商業学校入学                 |
| 〃 5年        | 〃 山岳部入部                        |
| 〃 9年 3月     | 〃 卒業                           |
| 〃 21年       | 戦争によりとだえていた神戸山岳会を復活、委員長に推される。  |
| 〃 23年       | 兵庫県山岳連盟創立に参画                   |
| 〃 27年～40年   | 兵庫県山岳連盟理事長                     |
| 〃 31年～40年   | 全日本山岳連盟理事                      |
| 〃 33年～      | 兵庫県体育協会常任理事                    |
| 〃           | 神戸市体育協会常任理事                    |
| 〃 35年～52年   | 全日本山岳連盟公認第一種指導員                |
| 〃 40年～      | 兵庫県山岳連盟副会長                     |
| 〃           | 兵庫県山の遭難対策協議会委員                 |
| 〃 44年～46年   | 社団法人 日本山岳協会理事                  |
| 〃 45年 4月～   | 神戸登山研修所所長                      |
| 〃 46年       | 環境庁自然保護委員                      |
| 〃 46年       | 兵庫県自然保護審議会委員                   |
| 〃 50年 3月    | 兵庫県山岳連盟ネパールヒマラヤ(P29)登山隊隊長      |
| 〃 52年～      | 社団法人 日本山岳協会監事                  |
| 〃 52年       | 兵庫県山岳連盟創立30周年記念登山マウント・レーニア登山隊長 |
| 〃 52年       | 日本山岳協会公認名誉指導員                  |
| 昭和 57年9月23日 | 剣岳・黒百合の科尔にて、心臓発作により永眠される。      |



## ( 役 職 )

日本山岳協会監事	環境庁自然保護委員
兵庫県山岳連盟副会長	財団法人神商同窓会常任理事
兵庫県体育協会常任理事	神戸市体育協会理事
兵庫県山の遭難対策協議会委員	神戸登山研修所所長
兵庫県自然環境保全審議会委員	六甲全縦市民の会副会長

## ( 表彰受賞 )

昭和40年10月	全日本山岳連盟功労賞
〃 46年 8月22日	兵庫県体育協会会長から功労者表彰
〃 47年11月 3日	兵庫県知事から兵庫県スポーツ賞
〃 47年11月26日	神戸市体育協会から功労者表彰
〃 52年 7月21日	環境庁自然保護局長から功労賞
〃 53年 5月14日	兵庫県山岳連盟永年役員表彰
〃 53年 5月	兵庫県自然環境保全審議会表彰
〃 55年 5月 3日	兵庫県知事から兵庫県功労者表彰
〃 55年10月10日	文部大臣から社会体育功労者表彰
〃 55年10月25日	神戸市長からスポーツ功労賞
昭和56年10月	環境庁長官から功労者表彰

# 昭和57年度 総 会

去る5月16日、登山研修所において総会が行われ、下記事項が決定しました。

出席者 27名(敬称略 順不同)

前田 浩、島田文雄、新川利夫、岡田政一、岸本光弘、藤本卓民、宮松 暁  
米沢典之、武田 禎、田中享三、内藤正司、山本泰彦、迫田哲郎、星野辰也  
中野 功、幸内義孝、吉田典夫、川辺秀司、国沢昭美、岡田 肇、堀野和子  
矢木研三、山内教史、神田章吉、井上雅代、萩本維都子、小林利樹

## 1. 昭和57年度役員

委員長 内藤

副委員長 星野

運営委員

企画 山内、幸内、小林

装備 吉田、星野

会報 国沢、山本

会計 南、矢木

庶務 井上、萩本

リーダー会 星野、川辺、小林、山本、幸内

## 2. 新会員の承認 迫田哲郎、吉田典夫、井上雅代、古賀英年(再入会)

# 臨 時 総 会

9月25日 前田浩氏密葬後、登山研修所にて臨時総会をもち、下記のように決定した。

1. 仮事務所 神戸市灘区高徳町5-3-1 内藤 正司宅

## 2. 会 計

通常の会計： 現役の会計が担当する 矢木研三、南みち代

財産管理者： O Bにお願いする。 新川利夫

会計 監査： 木村寅次郎、片山英一

# 昭和57年度 夏山合宿

## 合宿の概要

登山地：穂高岳周辺

パーティー：A班 迫田、小林、矢木、広池

B班 幸内、山本、吉田、国沢、大西

日程：昭和57年8月12日～8月16日

8月12日(晴) 大阪発(夜行)～

8月13日(晴) A班：松本～上高地～徳沢～奥又白池

B班：松本～上高地～明神～ひょうたん池

8月14日(曇のち雨) A班：奥又白～前穂北壁～Aフェース～前穂高岳～奥又白

B班：ひょうたん池～明神岳東稜～前穂高岳～岳沢

8月15日(雨) A班：奥又白～前穂高岳北尾根～前穂高岳～奥又白～徳沢

B班：停滞

8月16日(雨) A班：徳沢～上高地～松本～大阪

B班：岳沢～上高地～松本～大阪

## A班 行動記録

小林利樹

8月13日 上高地(6:55～7:30)→徳沢(9:20～45)→奥又白池(14:00)

8月14日 又白池(5:30)→取付(7:50)→前穂頂上(10:30～11:00)→又白池  
(12:40)

8月15日 又白池(8:30)→前穂北尾根→前穂頂上(12:30)→又白池(14:30～  
15:30)→徳沢(17:30)

8月16日 徳沢(9:00)→上高地(10:40)

8月13日 今合宿も昨年同様奥又白ベースに決まったので今日の行程は又白池迄ゆっくり行こうと話しチンタラ行進をする。今日1日は天気は、もつだろうが明日からの天気が気にか

かる雲行きである。パノラマ道と別れて中畠新道へのきつい登りにかかる所で広池君と天幕場確保のため先行することに決めたので二人で池までゆくことにする。この道はいつきてもきつく暑い登りである。又白池につくと別天地の様である。

8月14日 朝のうちは天気が良いが午後からくずれるという予報である。5時30分に天幕場をあとに北壁～Aフェースへの取付へ向う。去年より本谷は雪が少いので歩きよい。

C沢に入り北壁基部へと歩む。1ピッチ上った所でアンザイレンをし、東壁初登のルートである北壁へ向う。落石が多く大変恐ろしい。快適なAフェースをこえて頂上までいき行動食を食べA沢へと向う。ここも去年より雪も少く楽である。又白池で焼きソバやウイスキーを飲んで登攀祝いをする。午後から小雨がパラック。

8月15日 昨夜からの雨が上がりあいにくの天気であるけれども、北尾根5、6のコルへ行こうとテントを出る。コルまでいくと頂上まで行こうと北尾根を辿る。雨で大変寒く岩が滑つてこわいけれどもなんとか頂上までいく。A沢を下る所で少し行きすぎ時間をロスしてしまった。又白池に着いて今日は徳沢までいこうときめテントをかたづけ徳沢のテント場まで雨の中を降りる。今日は徳沢で宴会です。

8月16日 今日又雨が降っている。しかし上高地迄なのでゆっくりと帰路につく。

## 夏 山 合 宿

迫 田 哲 郎

上高地に着くや前夜のウイスキーが体の中をおどりだす。大変気分のよいものである。梓川のほとりをフラフラしながら歩いていると小石が邪魔をするステッソコリン。雨上りのぬかみでズボンに泥だらけである。まっこと恐怖の上高地である。明神、徳沢と水を飲みながら行く。新村橋を渡りいよいよ登り道にかかるころより、ズッキン、ガッキン頭の中が運動会を始めだす。ズッキン、ガッキンおおいでててて約2時間の苦痛であった。さあ又白池に着いたテントを張るか。ややおかしいぞ、このテントはビッコを引いている、なんとることよ足が一本足りないのである。四苦八苦で何とか体裁を整え先づは酒でも飲みましょ。時間は勝手に過ぎ翌日となる。北壁への取付き点まで何度も「落」の声を耳にしなが、身をちぢめて進む。取付きに来るや先行パーティーがぎょうさんいてはりますこと。取付で待つのはよろしいけど上から石落して来はりますのには、もうビックリ。中にはピッケル落してはる方もいてはります

すねんで。いよいよ我々の順番になる。先づ小林-広池組の出発である。小林さんがすーいすーいと登る。広池君が登る、僕がランニングビレイを取りまくって登る、矢木さんランニングビレイをはずまくって登る。松高カミンはカミンの中を登る小林さんがハングを登るのが見える。俺はほんまに行けるんかいなど不安になって来る。登ってみるとわりとすんなり行けるのです。北壁よりAフェースになるともう落石もなくなる。Aフェースは気持ちええなと調子に乗り最後の出口をまちがえて、えらいこっちゃホールドがないがな。「小林さん、ホールドがないえらいことや」、Mr小林「ここもてるのちゃう」、手をのばすと有りましたがな、やっと前穂に出て来ました。はよA沢下って酒盛しよ。テントについてウイスキーの残りとお林さんの酒を飲んでしまうと、もうアルコールなしの純な生活となってしまったので、またしても時間が勝手に過ぎアサーとなる。えらいこっちゃ雨がテントをたたいてまっせ。迷った末、ほんなら五六の科尔までピストンしよかといいながら出発。五六の科尔まで来ると、やっぱり前穂まで行こうかといいながら又出発。雨がやんでくれないので、だんだん体が冷えて来る。三四の科尔あたりでは歯が合わなくなる。それに雨風となりガチガチガチ寒むいなあとふるえ始めて来る。それでも小林さんが三峰をトップで登って行く。三ピッチほどスタックカットで全部小林さんにトップで行ってもらう。どうもすみません。雨ですべるので北壁よりこわかったです。二峰前穂はかけ足でA沢へはよ行きましょ。ありゃA沢が今日にかぎってありませんがな？ちょっとトラバースのやりすぎで約1時間のアルバイト後A沢よりテント場へ。これからどないしましょ、アルコールもないし徳沢へ行きましょかと一路徳沢へ下ったのでした。ビールをたらふくので明日の天気を祈ったのですが翌日も大雨で松本に下山。やっと雲の切れ目に太陽を見ました。嗚呼生きているんだなあ！

## 夏山合宿に参加して……

広池 義 則

8月12日 大阪駅は例年のごとく旅行者や登山客で、ひしめく中、僕は期待と不安にからまれながら夜行列車にみんなと乗りこむ。翌朝、松本に着き早々タクシーにて上高地へ。縦走隊はすぐに上高地を出発したようで、僕たち登攀隊はのんびり朝食をとって出発する。徳沢まで快調にとぼすが、これからは奥又白の登りで一番のアルバイトを強いられるところ。あわてず、マイペースで登るのだが、小林さんの後について行くと、すぐにその差は開き、気ばかりあせって急登の後半ぐらいからペースも乱れ、さすがにキツかった。やはり、トレーニング不足をつくづく痛感させられた。そして、やっとの思いで奥又白池に到達して、びっくり。池のまわりには色とりどりのテントが、そして頭上には大岩壁群が圧倒的スケールで迫ってく

る眺めは、もうすばらしい一言。まさに、今までの急登の苦勞も忘れてしまうようだった。いよいよ、明日はあの岩壁を登るのだと思うと、心が落ちつかない。今夜はぐっすり眠りたい。

8月14日 まずまずの天気である。北壁の取付点までは、まだまだ雪渓が残っていてアイゼンを着けて登る。取付点で登攀準備をして、小林さんがトップで早々と登っていく。途中、いたるところで落石が多く、びっくりする。ふと、下を見るとピッケルも落ちていくのが見えた。落石どころか、今度は人間も落ちてこないか心配したりして……。このルートは難なく登ることができたけど、ただ浮き石や上からの落石に注意ばかりしてた。天気も良いし、この岩壁から眺める景色は高度感もあって、気分そう快である。全員揃って前穂高岳頂上に出ると、簡単に昼食をすませ、天気の方がどうやら悪くなりだしたので足早にA沢へと向かう。A沢の下降では再びアイゼンを着け、1歩1歩確実に降りる。去年と比べて雪が少ないということだった。テントに戻り、改めて無事登攀を終了することができたという充実感でいっぱいだった。

8月15日 夜中からの雨が、一向に降りやもうとしない。今日の登攀は中止になり、そして前穂北屋根の縦走となった。五、六の科尔から前穂高岳までは、とにかく雨風で寒くガタガタ震えっぱなしだった。濡れた岩場を通過するのも恐いけれど、このときは寒さの方がこたえた。この雨で前穂頂上には誰1人といない。とにかく寒いので先を急ぐ。途中、A沢への下降点を見失ない、まちがえてしまう。前穂高岳頂上から下りる際、岳沢側へ寄ってしまったので、通り過ぎてしまったようだ。もう一度引き返し、登り直す。何とか下降点を見つけ、早々にA沢を前日と同じように下降し、午後3時前にテントにもどる。雨の中、荷物を片づけ、即テントを撤収し、徳沢へ。もう衣服もザックの中身も雨でびしょびしょで何とも気持ちが悪く、とにかく早く徳沢へ着いて落ちつきたかった。徳沢へやっと着いたのが午後6時頃、テントを設営して夕食の準備をすることは外は暗くなっていた。今夜は最後の夜、もう大変な宴会であった。最後に神戸山岳会に入会して、はじめての合宿であった。しかも、まだ入会して半年もたたないのに本番の岩登りである。いつもは1人で山小屋を利用して縦走するのとわけが違うし、ましてパーティーを組むのだから、要領のわからないことが多かった。はじめのテント生活や食事などの準備、そして本番の登攀にまで、なかなか思った以上にまごついたり、チョンボばかりやらかしたと思う。今思うと、悪天候にたたればなしの山行だったけれど、良き経験を経たし、本当に思い出深い山行でした。

## B 班 行 動 記 録

国 沢 昭 美

- 8月12日 大阪(22:20)ちくま5号  
8月13日 松本(5:21)＝上高地(7:00)－明神館(7:50)－ひょうたん池(14:00)  
8月14日 ひょうたん池(4:45)－ラクダのCOL(7:50)－明神岳(10:30)－A沢下  
降点(12:20)－前穂高岳(13:00)－岳沢(15:40)  
8月15日 停滞  
8月16日 岳沢(5:20)－上高地(6:40)＝松本(9:50)しなの4号

8月13日 晴

列車は思ったほどの混雑も無く松本に着いた。いつものように、タクシーで上高地へ入る。バスターミナルで登攀隊と別れ、まずは明神へ向って出発する。河童橋で、穂高の稜線がガスの中から顔を出している。穂高が一層高く見える感じだ。明神館前で朝食をとったあと、明神橋を右岸へ渡る。すぐに養魚場で、こゝで水を詰める。これで岳沢まで水を補給することが出来ない。飲みだめをすることは無理だけれど、しっかり飲んでおこう！

最初の1ピッチは、樹林帯の登りである。そこから明神岳五峰東壁へのガレ状の道と別れ、右へ入る。東壁への道がはっきりしているので、うっかりすると見過してしまいそうな感じである。道は急傾斜の上に両側の草木が繁っていて、非常に暑い。ガレ状の歩みにくい道を宮川のCOLに出ると、爽やかな風が心を和ませてくれる。こゝから尾根を越えて、左手に東壁を見ながら右上方へトラバースしていく。やはり急で草が繁り歩みにくい。喉が渇く！水を節約しなければいけないと思うと、余計欲しくなる。トラバースが終ると、ひょうたん池まではもう一息である。少し下の方に、小さな雪渓が見えた。山本さんと大西さんが、雪を取って来てくれる。粉末ジュースをかけ、渇いた喉をうるおす。予想外の発見で、こゝで大休止となる。幕営場所の都合もあり、今日はひょうたん池で泊ることに決める。池には、2張のテントがあった。池で繁殖した蚊やブトがいなければ、こゝはすばらしいテント場だろうと思う。蚊取り線香を持ってこなかったのは、まずかった！これも予想外のことです。夕食はレジャーシートを敷いて外で食べることにする。水の心配も無く1日を終れるなんて、思ってもみませんでした。

8月14日 晴のち雨

先行に女性2人パーティーがいるだけの静かなものであるが、出来るだけ早く核心部を抜けておかなければならないだろう。核心部のコルまでは草付きまじりの急な道であった。両側共けっこう切れていて緊張させられる。踏みはずしたら止らないだろう。振り返れば、今年の夏合宿で歩いたなが〜い縦走路が見えている。あれは本当に長かった！ 展望はかなり良い。富士山が見えるのは悪天の兆しではないか、と山本さんが言う。いつの間にか、茶白山や屏風の頭が眼下になっていた。奥又の池やテントも見える。登攀隊ももう登っているだろう。コルから、いよいよ核心部の登りである。先行の女性パーティーが岩稜の中ほどでルートを捜しているようだ。最初の1ピッチは、左へ少しトラバースしたあとガリー状の所を登る。上は広いテラスになっている。2ピッチ目は、広いフェースで、左手の凹角を登る。出際に、右側へ出ると登りやすい。岩は堅く、ホールド、スタンスがしつかりしている。その上は、またテラスで、そこから緩傾斜の所を30mほどコンテで登るともろい岩稜帯になる。そこからは、左右どちらへも登れそうである。右側の凹角に行く。足場が悪く、岩が浮いて不安定である。ルート中、1番緊張した所であった。その上も、やはりもろい岩稜帯で30mほど左上して行くと頂上へ出た。山頂での展望はゼロ。明神岳から前穂高岳へのルートもよく切れていて、慎重に行く。途中で雨が降り始めたが、もう心配はないだろう。前穂山頂で記念撮影をして、岳沢へ下った。

8月15日 雨

夜通し降った雨は、止みそうにない。一応出発の順備をして様子を見る。9時頃、登攀は中止と決める。テントを張った場所が石場だったので、水はけが良く快適である。ここもやはり蚊やブトが多く、閉口する。彼らの味覚本能(?)はすばらしく、餌食にされた方はたまつたものではないが、被害ゼロの人もいたのです！ 雨の合い間に、コブ沢分岐点まで行ってみる。雪渓がかなり残っていた。また今度来ようと、皆で話す。夜は、お隣りのテントから歌集を借用して歌うが質量共に敗けました。皆さん、これから装備表に歌集を加えましょう！

8月16日 雨

長野県に、大雨洪水警報が出ている。山本さん、大西さんも西穂縦走を取り止め、一緒に下山することになる。上高地へ下ると、あのきれいな梓川が濁っていた。釜トンネルも閉鎖されるらしい。タクシー乗り場で着替えをし、あわただしく松本へ出た。



## 夏山合宿（CLとして）

幸内義孝

今夏合宿は、計画が遅れ、各方面への計画書の提出が非常に遅くなってしまった。もう少し計画を早く立てるべきであったと思います。

僕自身、一度行ったことのあるコースであったのだが、テント場が少々心配でした。1日目は、ひょうたん池の下に雪渓が残っていた為と、疲れている人もあったようなのでひょうたん池で泊ることにした。明神からひょうたん池へのルートで、途中道に迷ってしまった。養魚場から1ピッチ目辺りで、右側の山の斜面がガレている所を右へ入ること。

2日目の東稜は、ハイマツをつかみながら登る。ザイルパートは、山本、吉田、大西と、幸内、国沢で組んだ。問題も無く、明神東稜から前穂へと行った。

3日目は、雨の為、沈澱。雨の岳沢も美しい。

ゴブ尾根に行けなかったのは残念であったが、皆仲良く楽しい山行であった。

来年は、もう少し早く計画を！

## 初めての夏山合宿

大西章代

8月13日、私にとって3度めの上高地はさすがにシーズン真っ盛りで人がいっぱいだった。空はあまりはっきりしなかったが、「来たぞ」という気持ちと、「大丈夫かな？」という心配とで余裕のない私にはそう気にもならなかった。

明神までは、平坦な道だけに、他の人の歩くのについていくのが精一杯。本格的に登り始めると、暑さと寝不足のため、時々眠気が襲ってくる。そのうち、徐々にからだも目覚めたようで、だんだんと元気になってきた。途中、間違えたりしてどうなるかと思ったけど、何とか、初日は無事ヒョウタン池に到着、そしてサイト。

ヒョウタン池に着く少し手前にあった小さな雪渓は我々の（少くとも私には）大変有難いものだった。肉体的よりも精神的に、「水がある」と思えるだけでずいぶん違うんだとつくづく感じた。

翌日14日、いよいよ東稜へアタック！と書けばすごいけれど、私はザイルに引かれて恐る恐る登っているの、とてもサマにはならない。登ること自体はこわくはないのだが、荷物があつたり、岩がもろかったり、たまに下を見ると、なかなか手や足がスムーズには出てくれな

い。それでもいつの間にか頂上に着くことができ、私にでもこんな登山ができたのだと妙に、うれしくなった。その頃には、朝方見えていた景色も全然見えず、まわりは真っ白で、この先の前穂への道も霧の中だった。それでも気分はすこぶる良かった。その後、時たまちらっと見える岳沢あたりに感動しながら前穂へ向かった。実際、この道の方が精神的には疲れたのではないかと思う。ちょっとした登り下りの繰り返しと言えそうだが、下りの時に出した足の横がストンと切れてるとか、細かいがしよっぱい所でズズッと崩れて行きそうだとか、「ひょっとして」と思うと体に力が入ってしまった。それでもやっぱり歩いてると前穂に着いてしまう。ここも真っ白の世界。初めてなのでどっちを向いているのかもわからない。「あっちに行くと北尾根」と教えられても「そうなのか」と思うだけで残念だった。何も見えないし、雨模様だし、長く居てもしかたがないのですぐ岳沢へ。ここの下りもかなりなものだと思った。「本当にこれで一般道？」と何度言ってみたことか。ただ、道以外のところを何度か歩いたのは確かだったけど……。

意外に急で、意外に長かったこの道がようやく緩やかになり、もうほとんど惰性のみで足が動いていた頃、テントらしきものがちらっと見えた。近いと思ったが、そう思うと、なかなか着かなくなる。やっとたどり着いたが、すでに満員に近く、場所捜し。悪いことに、雨もぽつぽつ。何とか場所が見つかり、整地し（私はその横で天気図とラジオをかかえて傘の下でうずくまっていたけれど）寝床は確保された。ちょうど下が石なので雨が降っても濡れずに済み、テントも広くなかなか快適だった。

15日、コブ尾根に行く予定だったのが雨で中止。一日中ほとんどテントの中で過ごした。寝て食べてを繰り返した。夜に歌を歌ったのがとても楽しかった。

16日、引き継ぎ雨。西穂へ行くのもあきらめ、即、下山。雨具をつけてテントをたたみ、一路上高地へ。せっかくここまで来たのにもったいないなあ、と思いつつ。ただ、生れて初めて河童橋を渡れたのがうれしかった。

# 昭和57年度 個人山行

## 氷ノ山スキーツアー（氷ノ山～戸倉）

山内 教史

昭和57年2月28日

メンバー：吉田、野上兄弟、吉田父娘、国沢、山内

6時ごろ丹戸の民宿を出る。東尾根へ入る橋を渡り、段々畑を登って行く。去年は最初からスキーを着けなければ、進めなかったが、今年は、はるかに雨が少ないので、スキーをかついで千本杉まで登る。ここから僕は、シールを着け、スキーで頂上まで登る。野上さん兄弟は、スキーレスで。

頂上は、たくさんの人達がいる、にぎやかである。ここで昼食を取りながら、頂上のゆるやかな斜面で、スキーを着けて遊ぶ。準備をしていよいよ滑降である。雪の状態は、あまりよくなく、深雪に入ると、足をとられてしまいそうである。なだらかな斜面から尾根に入り、少し登って、二ノ丸の一つ手前のピークで休む。ここから二ノ丸がしんどかったです。二ノ丸で、大休止、充分、時間もあるのでゆっくりする。

ここからスギ林に向かって、快適なスロープを下り、森林帯に入り、標識を追いながら滑って行く。僕が時々こける。六甲を、単車で走るようには、いかないものです。尾根を忠実に降りて行き、小さな植林の中へ入ると、斜面もきつくなり、横すべりのハイテクニク？を駆使する。この斜面を降りれば、林道に出る。このゆるやかな林道を降りてゆくのだが、どうもスキーによって滑る速度が違おうらしく、僕のバーゲンスキーは全然滑ってくれない。ワックスをぬってもダメで、ポートみたいに、ストックで必死にこいだものだから、林道についた時には息も絶えだえでした。いや～ 参いった。

ここからスキーをはずし、戸倉のバス停まで歩いて行き、バスの中でビールを飲めば、ゴキゲンの山内君でした。

# 乗鞍岳スキーツアー

吉田典夫

参加メンバー 現役 幸内、国沢、吉田、岡田  
OBその他 金田、数野夫妻、野上1号、2号、吉田父、妹  
以上11名

日程 昭和57年3月20日(土)夜 神戸出発  
21日(日)  
22日(月) 深夜帰神

天候 20日から日本列島は大荒れ、21日昼ごろ寒冷前線が通り、気温が急激に下がり、山岳地帯は吹雪。22日は無風快晴。

現役以外の人は、一日はやく乗鞍高原の国民休暇村(標高1620m)に宿泊しゲレンデスキーを楽しむ。現役は20日夜、神戸を発ち、翌朝、休暇村で合流。天候は雨模様だが、午後から回復に向うとの予報。雨がやむまで待機。

昼、位ヶ原山荘をめざして出発、小屋泊りという気やすさから、シュラフ、ツェルトを残して行く。幸内さんは、コンロ、ピッケル、アイゼン等持って行かれた。あとでこれが幸いすることになる。

リフト3本乗りつき、カモシカ平(標高2000m)につく。あいかわらず小雨で視界悪し。リフト終点より樹林の急坂をジグザグに登って行くと、巾3mぐらいの平坦な林道がつついている。1時間ぐらい歩いた所で食事。雨はやんだが、視界悪し。金田さんの話では、位ヶ原小屋まで、あと1ピッチとのこと。

再び歩きはじめると、また急坂になり、これを登って行くうち、視界が悪いのと、シールをつける、つけないによるスピードのちがいで、2つのグループにはぐれてしまった。(午後3時ごろ)

① 金田、幸内、数野夫妻 ② 野上兄弟、国沢、吉田、岡田 のグループに。急坂をのぼりきったところ(通称 台地とよばれている。標高2500m)で①グループを見うしなってしまう。①グループの話は後にして、②グループの話をつづけます。前線通過とともに風雪がつよまり、視界も悪く、気温も下がり最悪の条件。

その上、ビバークの用意もない。位ヶ原より大分、上に登ってきているはずなのに小屋も見つからず。野上さんの判断で、16時30分頃まで、台地付近をさがしまわる。しかし小屋は

見つからず、登ってきた道をひき返す。あとで分かったことだが、我々が来た道は、リフト終点より直接、肩の小屋へ登る道であり、スキーヤーの下降、及び荷上(雪上車による)に作られたものであった。だから位ヶ原の小屋は台地のはるか下、ずっと北側にあったことになる。だから位ヶ原に行くには、最終リフトの中間点を横切っている自動車道にそって右上に登って行くといわけだ。

ひき返しはじめて、樹林の中に入ると風もおさまり、気分的にもおちついてくる。ここで、スキーをつけて、すべって降りることにする。20時 休暇村着。

⑧ グループが休暇村に着くと、位ヶ原山荘には金田さんだけが着いており、残りの3名は行方不明とのこと。とりあえず、⑧ グループ全員が休暇村へ帰りついたことを位ヶ原の金田さんに連絡する。残る幸内、数野夫妻の行方を案じながら眠れぬ夜をすごす。翌日、リフト終点まで行き、そこで全員合流。

幸内さんの話によると、台地付近ではぐれてから、⑨ グループは肩の小屋まで登って行き、そこではじめて、位ヶ原山荘とちがうことに気がついたらしい。肩の小屋でひよんなことから金田さんとはぐれてしまい、位ヶ原山荘に下る途中、山荘が見えたのだが、暗さのため行手が急な雪壁に見え、行きつけないと判断し、樹林の中で雪洞ビバークしたとのこと。幸内さんが、ピッケル、シュラフ、コンロ、羽毛服を持っていたことが幸いする。

22日、全員そろって帰神

- 反省点
- 計画書を出さなかったこと。このとき、神戸港労山の八ヶ岳なだれ、遭難ともかさなり、各方面に迷惑をおかけしました。
  - 全員まとまって行動しなかった事。
  - ビバーク用具を持たなかった事。
  - ルートの研究がなく、金田さんにまかせてしまった事。

## 明星山P 6 南壁 マニフェストルート

山内教史

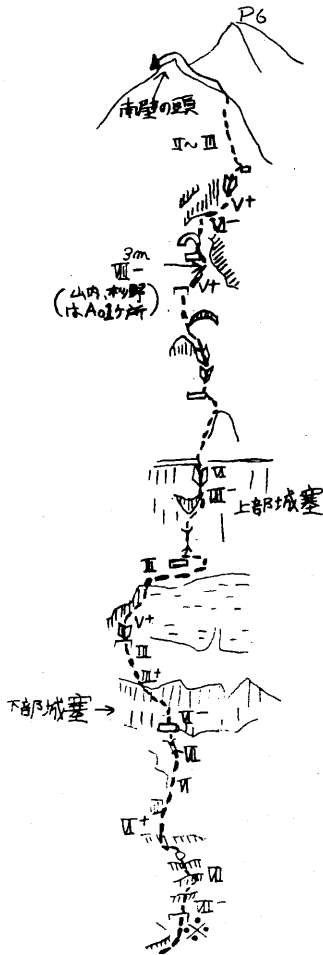
昭和57年6月20日 晴れ時々夕立

メンバー 山内教史、杉野真介(神戸FAC)

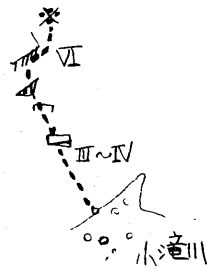
明星山P 6 南壁マニフェストルートは既成のダイレクトルート(V、A2)の弱点をつき、オールフリーで登るルートであり、昭和56年10月に森徹也、桑原聡両氏によって開かれたルートでUIAAグレードでVI~VIIが連続する高難度のルートです。

今回のパートナーである杉野さんは、北山公園ではトップレベルのクライマーであると僕は思っている。その北山公園のトップクライマーと妙号岩の△□クライマーがこのルートの第5登をしようと車で19日の夜展望台に着き、次の朝5時にこのルートに取りついたのでした。「オヤ、雪が降ってきた？」杉野さんが手にチョークをつけているのです。「さあ行くぞ！」「O.K.！」と僕。左へトラバースそして立ち上がろうとするが、杉野さんの身体がふりこのように大きくスイングした。墜落である。さすがⅦ級である。この3ピッチ目の最後のハングを突破しようというのである。「さあもう一度」2番目のハングを越えて立ちあがる。指がホールドをさがす、無い！有った？あと1ムーヴ杉野さんがハングの上に消える。成功である。さあ次は僕の番だ。1番目のハングはマントルぎみに越す。二番目は右へトラバースぎみに、又左へ第一関節のトラバースで最後はあるかなしかのホールドでハングを越す。

明星山 P6 南壁 マニフェストルート 図



次のピッチはⅦ+の快適なスラブであり僕がリードする。次のⅦのピッチも快適で荒地山に登っているようである。そして下部城塞(Ⅵ-)を突破し7ピッチ目(V+)を登り8ピッチ目(Ⅶ-)上部城塞の登攀である。リーダーは杉野さんである。ダイレクトルートの右のクラックから登り始めハングの右のカンテから登ろうとするがなかなかむずかしそうである。プロテクションはダイレクトルートのボルトである。もうかれこのピッチで40分近く経過している。杉野さんもうまく登れなくてイライラしている。意を決して強引に体をずり上げジワミング、左手が上のホール



ドをつかんでクリアである。荷上げをして僕が登る。やはり刻心部のジャミングは登り応えがあり、おもしろかった。Ⅲ～Ⅳのガラ場を登り10ピッチ目(Ⅳ+)、三日月型ハングを左から登り、杉野さんをビレーしていると夕立である。しかしここは天井(鷹ノ巣ハング)があるので雨に濡れない。11ピッチはⅤ+のバンドを右上しⅧ-のスラブを登ろうとするがホールドはほとんど見当たらず、杉野さんのクライミングテクニックをもってしてもダメであった。A0である。セカンドの僕もフリーで登ろうとするが、やはりA0である。このピッチを終えると大洞穴に入る。この洞穴はその名のとおり広く3人用の吊天なら、楽に張れそうである。このルートのハイライトでもある鷹ノ巣ハングをフリーで突破する次のピッチ(Ⅵ-)は僕がリーダーである。垂直のフェーイスをハングの天井まで登り。フレンズでプロテクションを取りながら出口ヘアンダークリングでトラバースする。出口からは、ランペをアームジャムで右上して行くとザイルが流れなくなり、途中のクラックにフレンズでセルフビレーを取り、杉野さんをビレーする。この上はもうむずかしいピッチは無く。Ⅱ～Ⅲぐらいのイージな2ピッチを登ると終了点である。ザイルをほどいて杉野さんと握手。無事登攀終了した事を喜ぶ。今回のクライミングでは杉野さんの力に負う所が多くあり、僕のレベルではⅦのリーディングは極限であったと思う。しかし今度ここに来た時はあのⅧ-のピッチを含めて、リーダーで登りたいと思っている。そしてこのラインを開いた森、桑原両氏に敬意を表したい。最後に“フリーバンザイ” “フリーが最高”

## S E X Y ク ラ ッ ク

(オリーブのかおりの中でのクライミング・・・小豆島)

山内 教史

僕が小豆島、吉田の岩場を初めて訪れたのは四月の上旬でした。そして又僕は凝りもせずフェリーから福田へ上陸したのは6月23日でした。なぜ“凝りもせず”と書いたのかといいますが、1回目の時はトップで墜落を2回もやってしまい、さすがにずぶとい僕も神経をズタズタにやられて帰ってきたのでした。しかしあの白い壁に走るクラックと青い海が忘れられなく、またやって来たのです。福田へ着くと吉田へわがスーパーカー?のハンドルをきります。あっという間に吉田のヨットハーバーです。目を海から山へ向ければ、目指す岩場が目の中にとびこんできます。そうまさしくとびこんでくるという感じなんです。川の名前は忘れましたが吉田湾へ流れ込む川を渡ってすぐ左へ入りまっすぐ川に沿って行くとえん堤があり、ここがキャンプサイトです。早速登攀準備をします。今回のパートナーは、神戸アルパインクラブの岡島さん(好日山荘、センター街の店長)、関学山学部の幅田さんで、1日おくれてC、K、

Kの高須さんが来る予定です。準備が整うと今日の一本目を登りに取付へ向います。まず1本目目のルートはこの壁で一番イージーなルートで、ルート名は忘れました。まず1ピッチ目はIVのクラックで幅田さんがリードで登る。次のピッチは岡島さんがIII+のスラブを登り3ピッチ目IV+のクラックを僕が登ってこのルートも終りです。このルートは2ピッチ目のスラブがほとんどプロテクションを取れないので墜落は致命的です。ここから踏跡をたどりながら次のルートである“きもちんよかフェイス”の取付に向う。なおこの岩場はまだ開拓途上なので道も満足なものも無く、やぶこぎを強いられることことも多くあり、いくらヨセミテスタイルのクライミングができるといっても、ショートパンツでは足がかわいそうである。あとの二人はこのスタイルなのでもう早くも足に血がにじんでいる。僕は平気な顔でやぶをこいで行く。

“ああ優越感” 次のきもちんよかフェイスは岡島さんがリーダーである。このルートは刻心部のプロテクションの取り方がポイントとなる。水平に走るクラックに、チョックをかますテクニックが、必要である。クライミングは、VIクラスである。2ピッチ目は幅田さんが、リードする。このピッチで、4月に来た時、僕がトップで、落ちたのを思い出す。幅田さんがクラックから足が抜けないと、わめいている。その苦悩に満ちた表情を岡島さんがカメラで写している。他人が苦しんでいるのは、なんとも楽しい。なんとかこのピッチを抜けるとこのルートも終りで、いよいよ、この壁最高級のルートである、スーパー・ダイレクト・クラック。略してS.D.Cに向かう。まだルートは2登しかされておらず、初登は高須さん、2登目も高須さんが、登っている。2回目は僕がフオーしました。1ピッチ目、僕がリードして行く。IV+ぐらいだが、スラブなので、所々入っている、岩のしわに、ナッツ、チョック、フレンズを駆使しながら登って行く。なお書き忘れたが、ここの岩場は、残置ピトン、ボルトは、ほとんど無く、すべて自分達がプロテクションを取りながら登って行くのです。又それが楽しく、ここでのクライミングをより充実させるのです。

2ピッチ目はIIIぐらいだが、3メートルぐらいの、岩のクレバスがあり、飛ばなくては、いけない。あとの二人は、初めてなので、なかなか、ふんぎりが、つかない。3ピッチ目が、このルートの核心部で、VIぐらいである。岡島さんがリードして登るが、途中で降りてくる。

結局、僕がリードする。最初は3センチぐらいのクラックで、途中でクラックが消える。

小さなホールドを拾いながらかぶりぎみのクラックへ入り、フレンズで小まめに、プロテクションを取っていき、じりじりとジャミングで高度を、かせぐ。やっと核心部を抜けた時は、手が完全に、いかれていた。落ちなかった事を、神様に感謝しながら、セカンドをビレーする。

二人とも登って来て、スゴイ、スゴイを連発していた。

4ピッチ目は、ビレーポイントの、上のハングを強引に乗越すと終了である。

まだ時間も、ありそうなので、もう一本登ることにする。ルート名は、“骨折り男のクラック”



Vぐらいである。リーダーは僕である。このルートは1ピッチだけれど、典型的なクラックアンドジェードルクライミングが楽しめる。三人とも登り終え、懸垂下降で、キャンプサイトに着いた時は、もう暗くなっていた。

ビールで乾杯すれば、最高の気分です。

24日、6時ごろ、ミワスラブから登り、トップロープで新ルートに登ろうと、ザイルをセットする。セットできたところに高須さんを福田に迎えに行く時間になったので、テントにもどり、福田へ向かう。福田へ着くと、フェリーが、ちょうど接岸するところで、高須さんがデッキから、手をふっている。高須さんと久々の再会である。

まず福田の町で、必要な物(かとりせんこう、粉ジュース)を買う。ショッピングを終え、また、岩場へ行く。まず最初に僕が、トライする。最初から、出だしのハングが登れなくなり、そばにある、ブッシュを使い、チヨンボする。そして3メートルぐらい登った所で、水平クラックに行手を、はばまれ墜落。水平に走る、クラックにジャミングをきかせる、というのは、非常に、シビアで、今の僕には、数回の、トライを要するであろう。幅田さんも、岡島さんも、同じ所で、落ちている。高須さんが、トライする。さすが高須さんで、ハングを左手から乗越し、クリアする。問題の、水平クラックも、1回の墜落の後、クリアする。テラスに立ち、いよいよ、クラッククライミングである。最初が、かぶっていて、しぶそうで、高須さんも、苦勞しているようである。しかし、じりじりと、高度を勝ち取って行く。クラックが終り、今度は、スラブで、そして、ついに、完登である。

そして僕が、また登る。ハングもクリアでき、水平クラックも非常に苦心して、やっと抜ける。クラックに入ってから、シビアなクライミングが続き、はるかに、僕の力の限界である。いや、つかれました。、、、 おそらくVI+は、あるだろう。僕が、登り終り、プロテクション用のボルトを、上部スラブに一本打つ。それから僕達は、ミワスラブの左手にあるバリエーションルート、“ペガサス”のフリー化を目指す。下部がむずかしく、断念。残念。午後から新ルートに登ろうということで、少し上の方の岩場へ行ってみる。クラックが下から右上して、快適そうである。僕が、リードする。途中から左のカンテへ回りこみ、小さいホールドを、拾いながら登り、最後は、クラックをジャミング、レイバックで登れば終了である(IV)。

そろそろ岡島さんが、帰られる時間なので、テントにもどる。

岡島さんと、福田で別れ、僕達は、今晚のエサとビールを買って、吉田へ。吉田の浜で、あさりを取る。僕と幅田さんが、あさりを、高須さんが、カキを取る。みんな子供のように、一生懸命である。一時間ぐらいで、L形の一番大きいコツヘルが一杯になる。砂浜で、買って来た、

ビールの栓を抜き、これもまた買って来た、イカ、かいわ大根と高須さんがとってきた、カキをチャンポンにし、わさびしょう油で、味つけすれば、大変、デリシャスであります。遠く沖を、夕日をあびながら、船がゆっくり走って行く。実にロマンチックでありまして、こんな時、かわいい女の子がそばにいれば、／＼・・・・・・

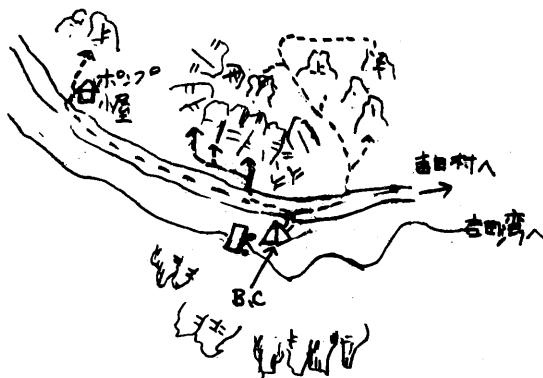
テントにもどり、探ってきたカキで、カキカレーを食べる。これもまたデリシャスでした。

25日、あさりの雑すいを食べる。2本ぐらい適当に登り。早々にテントをたたみ引き上げる。吉田の浜で、また遊ぶために、ゝゝゝゝ

最後に、僕は2回の、小豆島行きで、想った事は、クラッククライミングの奥の深さ、むずかしさ、そして楽しさであった。開西のフリークライミングの第一人者である、難波康則氏も言われている。「もし世界中のビック・ウォールやクラックに、一条のクラックすら走っていないかったら、クライミングのムーヴは、フィンガー・パワーと万力のような筋力のみが活躍する、単調で魅力のとぼしい行為にしか過ぎなかったろう。陽光に映える真白いフェースに一直線に刻まれたクラックは、ただ困難さを予感させる以上に、なによりも美しく、セクシーでさえある。」と・・・・・・そして僕も、小豆島のクラックに、保塁のクラックに魅せられ、夢にまで見ているのです。あの白い花崗岩に、抱きつき、キスをするのを。

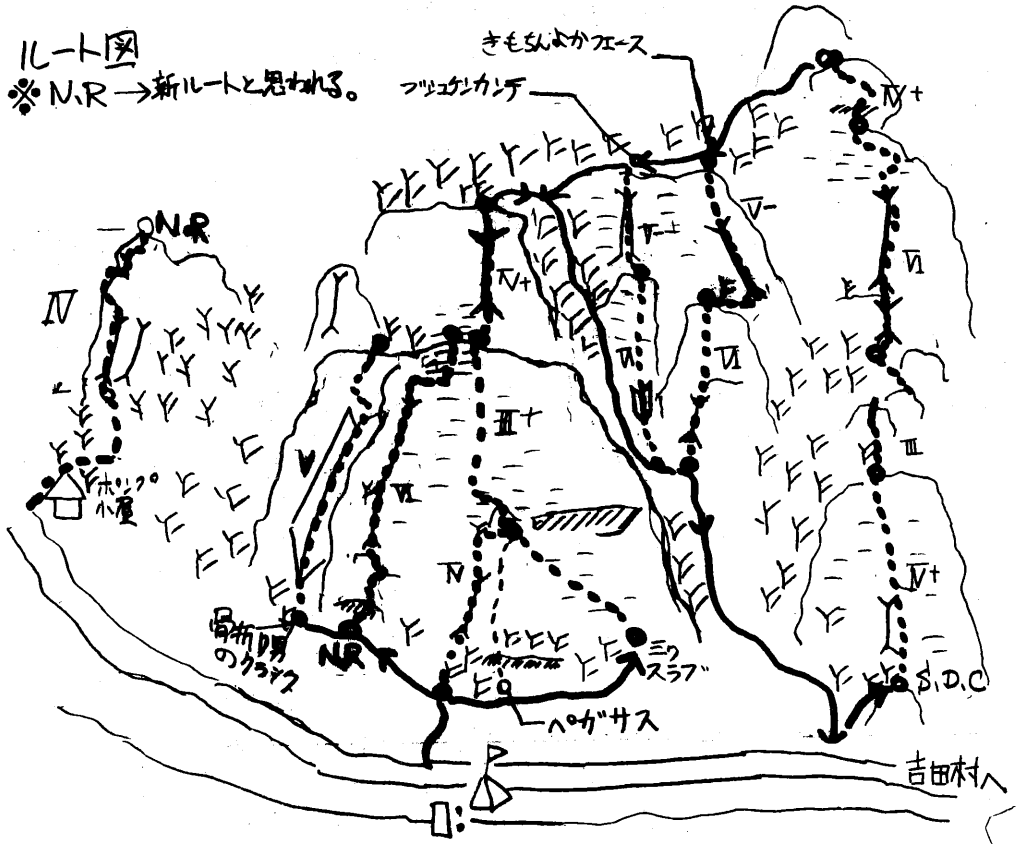
## ◎小豆島

### 概略図



ルート図

※ N.R → 新ルートと思われ。



穂高・滝谷

小林利樹

メンバー：（吉田）、小林

昭和57年8月28日～8月30日

会社の友人の吉田さんと滝谷へ行こうと以前から云っていたがずっと天候が悪く6月末に行った時も雪で残念であったので用意周到で行くが今回も台風の影響でどうなるやらの気分で夜

行「きたぐに」に乗り込む。

8月28日 新穂高温泉で朝食をとり一路、滝谷出合へ歩を進める。バス停で見上げるが雲が速く天候がおもわしくない。白出出合の林道終点到警察の車および他の車が多く停まっている。これはおそらく遺族が滝谷へ遺体が出てきたので供養のために来ているのだろうと話をしながら行く。滝谷出合で警察、遺族の方々が供えものをしていた。その横に行くのは何か気がひける思いだ。雄滝は右岸に行く。途中から台風の影響で雨が降り出すが右岸をへつりながら雌滝までゆくが雨が本降りになってきて自然落石多く大変こわい。

雌滝も右岸をゆく。出合の少し手前より残雪の上をゆくが落石が多いためたまらないのでD沢側壁へエスケープしてここでピバークとする。

夜中もずっと落石で自然のすごさを思いしる。

8月29日 今日昨日からの雨がやまず今日は少し下ってC沢左俣の四尾根に登る予定であったが落石が多いので一番安全なE沢をつめて溜沢岳に登るのがよいのでE沢をつめる。

今日も1日中雨強く寒い。

8月30日 今日雨で日が明けるので滝谷登攀もあきらめ白出沢を降りるのに決定する。新穂高で温泉に入る。今日のフィナーレは温泉であった。

雨の降る中を一路神岡駅までうらめしく空をながめながらバスの客となる。

今回の山行は雨であったが滝谷の出合からの登攀であったので少し満足？

付記 雄滝は右岸に登る方が少し易いようだ 3P

雌滝は右岸に登る方が大分易いようである これも3P

尚、雌滝は残雪を最後まで詰めるとシュルンドが深く川床へ降りられないので50m位手前で左岸側に降りて本流を右岸側にわたって取付く方が楽である。

(左側へ降りても詰められるが傾斜ややあり)

## 小西正宏君遭難

小西正宏君は、昭和57年1月15日中央アルプスの縦走にむかったまゝ消息をたちました。2月に同君の遺品が、伊那側の黒川上流で発見され、さらに、5月18日、遺体となった同君が発見されました。享年23才。

### 遭難に思う

内藤正司



宝剣山荘前の小西君  
(遺品のフィルムネガより)

“遭難” 登山を行っている人々が、この言葉を聞くと、ドキッとするだろう。遭難事故ほど悲しいものはない。今回一番恐れていたことが発生した。岳友の気持ちの一つの目標に向かって押し進んでいる時はまだまだが、各自好きな山行を行っているバラバラな時、一つにまとまらねばならぬ難しさが、第一の問題であった。だが、皆の心はそこまで離ればなれでなかった。実際喜しかった。同じ山仲間(たとえ顔を見たことも名前も聞いた事もないが、KACに入会して半年の人)であるということで、捜索活動に協力する盛り上がりが出来た事は事実だった。

小西君は、結果として全身衰弱凍死してしまいました。

原因は多くあるが、冬山に入るには余りにも経験不足と、山に対する謙虚さが貧しかった。日常生活での体調コントロールの悪さで、山に入って非常にペースの遅れがあった。すべて、一つの原因でなく、いろいろと重り合って起きた事故と思う。一瞬にして、親や周囲の人達に悲しみとむなしさの全てを死というものによって味あわさせた不幸を、どの様に考えたらいいのだろうか。

登山を行っている者は、いつでも現実として起りうる事である。でも登山はそんなに危い事ばかりではない。基本を守り段階的に目標を上げ、それにあったトレーニングを積み重ね、いろいろな知識を吸収し、全力をつくせば、危険から少くとも逃げられると思う。だが自然の力には勝てない。常に謙虚な心を持つことだ。

最近の登山界は、余りにも他人志向で細分化すぎる様だ。登山は他のスポーツよりもっときびしく、一つの失敗が死に直結している。どの様な形式の登山であろうとも、もっとイズムを持って真剣に登山を考えて、自己の人間形成を計らなければならないと思う。

小西君の遭難を、大きな教訓として、より高度なアルピニズムを追求する為には、自然に対して絶対的なものはないという山に対する謙虚さと、如何に小さな事故も敗北であるという信念のもとで、山に対するマナーを十分に身につけて欲しいものである。

遭難は、人間自身の誤りによって起るものだ。原因はどうであろうとも、現実を認め故人の冥福を心から祈ります。

## 小西君の行動記録

昭和57年1月16日～20日、パーティ：小西（単独行）

行動予定：木曾福島—上松道—木曾駒ヶ岳—宝剣岳—空木岳—池山尾根—駒ヶ根

1月15日 大阪（22:20）—

1月16日 木曾福島（4:02）—上松二合目（7:34～7:45）—敬神小屋（8:33～8:53）—金懸小屋（五合目）（11:55～13:30）—八合目（19:53）

1月17日 八合目（11:05）—玉ノ窪（13:30～14:10）—駒ヶ岳頂上（15:20～16:00）—宝剣山荘（16:30）

このコースタイムは小西君の遺品より発見されたものを転記したものです。

## 第 1 回 捜 索

迫 田 哲 郎

### 1. メンバー

星野（L）、小林、堀田、山内、迫田

### 2. 行動記録

昭和57年1月23日

新大阪（8:06）——名古屋——駒が根——しらび平——千畳敷（15:50）

千畳敷の天気（15:00）；小雪 ガス 視界30m 気温 -20℃

16:30 前田会長宅に電話連絡

新しい情報なし

17:06 上松の山本会員に電話連絡

(1) 小西君の装備等についての新情報有り

服装 Wヤッケ……赤

テント IBS……ブルー

ザック……………グリーン又はオレンジ

(2) 五合目付近で三重大学の方々と出会う(八合目まで行くこと可能な時間に)

(3) 上松の搜索状況(警察捜査隊)

19日、20日、21日と3日間ヘリコプターによる搜索

(他の遭難も有ったため)

23日 上松道を八合目まで搜索(積雪1m)

19:55 駒が根警察より電話有り。

明日(24日)の搜索は千畳敷から上松道八合目付近まで行う。

20:02 上松の山本会員より電話有り。

1月16日に名工大パーティーが、下山途中六合目付近で、小西君に出会ったとの連絡有り。(かなり疲労していたとのこと)

21:49 上松の山本会員より電話有り。

24日の山本会員との連絡は、12:00と15:00とする。

各小屋付近のゴミ等を調べて、神戸又は姫路方面で買ったようなものがあるかどうか点検せよとのこと。

1月24日

6:20 千畳敷出発

極楽平で4~5張りくらいのテント跡有り ゴミ等を点検したが手がかりなし

8:00 島田娘より千畳敷の堀田会員にトランシーバーにより交信したが状態が悪く交信出来ず

9:00 ~ 12:00 宝剣岳搜索

3カ所で沢を各々、80m、100m、120m下降したが手がかりなし

12:30 宝剣岳、中央稜の頭より双眼鏡で沢を見渡したが何も発見できず。

13:00 天狗山荘付近でエバニューのランタンを見付ける

13:30 中岳と木曾駒が岳の中間付近まで搜索

頂上山荘付近に幕営跡は有るが小西君の手がかりとなるものは何も発見できず。

14:10 千畳敷山荘着

14:52 山本会員に電話連絡

25日の上松道のKACによる搜索は中止して、3人下山。25日9:30頃小西君の弟君が千畳敷に入るとのことで、星野、小林両会員が山荘に残ることとする。

16:00 堀田、山内、迫田の3名下山

## 第 2 回 搜 索

内 藤 正 司

2月15日、小西さんより電話が有り、遺留品が発見されたとの連絡、岸本、宮本、内藤の3名が19日夜ちくま5号にて出発する。

2月20日 塩尻(4:49)ー駒ヶ根(7:46)、雨が降っていた。駒ヶ根警察署の外勤課上村氏にお会いし、ご挨拶をし、今後のアドバイスなどいろいろな世話になる事を、おたのみした。ところがバスがしらび平途中で雪崩によって不通との事、開通予定は明日との事、やむをえず駒ヶ根の宿に泊る事にした。

2月21日 曇り、いつ雨が降るかわからない天候、バスは動いた。一番にて千畳敷ロッジへ向う。ロッジにて、木下氏と会いご挨拶をし、よくたのみました。すぐ宝剣山荘に向う。

やはり天候は悪くなりはじめ、宝剣山荘に着いた時は、視界は5~8m位でどうしようもないので、一服して晴間を待つ。約1時間程で少し視界がきく様になったために出発した。

持っていったペナントを各所に立て下降していく、現場付近は多くの雪で遺留品どころではなかった。大滝の右岸は、板状雪崩でそこより下る気はしなかった位、雪の状態が不安定だった。約2時間程で帰路につく。

## 第 3 回 搜 索

山 本 泰 彦

昭和57年5月1日~4日

参加者；内藤(L)、星野、幸内、小林、山本、迫田、川辺、山内、神田、岸本、宮本、矢木、岡田、星加、野上(1)、萩本、国沢、井上、吉田

山岳会に少し在籍したというだけで、小西君と一面識もない方々が、搜索に加わって下さっ



た。一般社会では、考えられないことである。「山屋はいいなあ！」大阪駅で思わず目頭があつくなる。

塩尻で少し降りだした雨も駒ヶ根駅につく頃には、本降りになった。ロープウェイの終点、千畳敷山荘の様子をみるが、変わらず。雨具を着けて出発。一時間で主稜線上の宝剣山荘に着く。千畳敷との分岐点には、大きな案内板が立っている。不運にも小西君はこれをみすごして黒川のゆるい斜面に、ひきいれたのであろう。午後は小屋で停滞。

5月3日。一晩中、屋根をたたいた雨も、暁方に止んだ。でも昨夜の天気図では半日天気かともてばいいぐらい。食当の女性を小屋に残して、男子全員、ゾンデ棒、スコップなどの獲物を手にして、黒川へ下る。下ること20分、大滝上部左岸の灌木帯の雪の上に、マット、ポール袋を発見する。スワ／＼と色めきだつが、どうも稜線のテント場からとばされたものらしい。2月に遺品が見つかったと思われる地点を巾1m長さ10mで雪を掘りだす。2m掘った時、スコップの先に手ごたえがある。残念なことにそれは竹の束であり、2月の第2回搜索の時に岸本さんらが目印にさしていたものである。付近からピッケルでさした穴もそのままで見つかる。2月の時よりも2mも積雪が多いなんて！一瞬ガックリくるが、気をとりなおしてどんどん掘り進む。ノコギリがブロックをきりだすのに威力を発揮する。巾も5mに広げた。深さ5mほど掘ったところで、ゾンデ棒が地表にあたる。手ごたえのある所を地表まで掘ると、それは木の枝であった。小西君がこの雪の下に眠っていると思うと遺品でもでてこないかとガンバってみるが、タバコのスイガラぐらいで手掛りなし。積雪の前に人間はなんと無力なのか。雨足がひどくなったので、後髪をひかれる思いで、小屋に戻る。

5月4日。雨がパラパラ降っている。この積雪では、遺体発見は困難であり、今回の搜索は打切る。ゾンデ棒を小屋に預ける。六月にはいつ雪が融けたら、また搜索にこよう。

## 遺体発見の知らせを聞いて

星野辰也

5月の連休に会員有志による遺体搜索後2週間程過ぎた5月15日(土)宝剣山荘従業員により、大滝二段目の落口で、ザック、靴等の遺品が発見回収された。5月18日(火)遺族の意向により現地で搜索隊(13名)が編成され、遺品発見場所周辺のゾンデによる搜索活動が行なわれ、PM2:05にテントらしき感触が得られた。PM3:00、黒川大滝二段目落口の積雪下1.5mのところ以小西正宏君が発見された。テントをかぶりシュラフの中に入った状

態において、実に遭難から4ヶ月後であった。捜索隊の手でPM5:00宝剣山荘へ。それから千畳敷経由で、ロープウェイを利用し、麓の駒ヶ根市へPM9:00頃おろされた。病院で検視後、小西君の遺体は駒ヶ根市の如来寺へと移された。

一方我々(内藤、岸本、宮本、星野)は、遺体発見の知らせを受け、18日午後7:00神戸を出発、名神~中央自動車道経由で駒ヶ根市警察署にPM12:00に到着した。署の方にあいさつを済ませさっそく如来寺へ向った。寺でお父さんから発見時の状況を聞く。遺族の方々には大変長い4ヶ月間であったでしょうが、冬山遭難としては比較的早い時期に発見出来、又遺体の状態も良かったのがなによりであった。お父さん、弟さんそれに我々4名とで通夜を過ごす。

5月19日 前夜大阪をちくまで出発されたお母さんと親戚、友人の方々を駒ヶ根駅へ迎えに行く間、寺で遺品を調べてみる。テント内からはEPIガスコンロ、ローソク、食料それに多数のマッチ棒が出てきた。しかしながらマッチ棒は先端部のみこげているだけで、又ローソクそれにコンロ内にガスが30分間程度残っている所をみると、残念ながらテント内で暖をとる事は不可能であつたらしい。20本近く使用されたマッチ棒を見ると、その時の無念であつたらう彼の気持がはかり知れる。火さえあれば、1月17日・18日の気温は千畳敷で-20℃であった。お母さんとの悲しい対面を済ませ、9:45からのお経の後、10時過ぎ如来寺より市郊外の北原火葬場へ向い、火葬に付される。本日の中央アルプスは、4ヶ月前のその日とはまったく様相を異にしており、あくまで美しく澄みきっていた。遺骨は両親に抱かれひとまず寺に帰る。なにやら胸のつかえがとれたようなホッとした気持ちになる。遺族の方々の心配りをいただきながら、彼のことや遭難時の状況についてなどを語り合い、午後2:00如来寺を後にする。午後7:00神戸へ到着。内藤さん、宮本さん長い間の運転御苦労さんでした。

## OBの立場より

米沢典之

小西君、独り冬の木曾駒に行きて還らずと聞き、会員として直ちに役に立ってない事を悔しく思いました。会員に依る第一次捜索の結果報告を受け宝剣岳以北の伊那側を推定し気が遠くなる想いでした。黒川源流で装備が発見され第二次捜索の結果報告を受け、残雪期迄解決が遷延するは必然とパトロールの用意を始めました。現場の把握は2万5千分の1、五百沢著「鳥瞰図譜日本アルプス」のイラスト、「岳人」よりの当該文献に依り、又宮松会員が常時所轄署に連絡、情報を提供して下さいました。

4月28日 22°00' 車で須磨自宅出発。目的：地方関係各方面への挨拶と根廻し。

4月29日 2°30' 駒が根署着 仮眠後挨拶 同署員並に地方救助隊員数名と共に  
6°00' 駒が根駅前発臨時バスにてしらび平  
7°00' しらび平発臨時ロープウェイ 千畳敷山荘挨拶  
8°30' 千畳敷発 救助隊員一名同行、サポートして下さる。積雪4m  
11°00' 宝剣山荘着 挨拶 ガス濃く視界なし。現場積雪推定5~6m  
小屋の御主人と相談、後々の事を願って下山  
14°00' 駒が根署着 挨拶  
14°30' 同 発  
18°45' 帰宅 内藤リーダーに報告

5月16日 総会席上で宮松と5月23日を約束。新川先輩は6月初めを予定して下さったので更に力を得て兩作OBに一任下さる様内藤リーダーに願います。5月18日、御遺体発見の非報に接す。此度は神戸山岳会全員が再び小西君に会う迄は他の山に登る事なしと覚悟努力された事が、不幸な出来事とはいえ、地元各方面の熱意ある協力を得、最善の状態の問題を解決し得たと信じます。末尾乍ら紙面を借り御両親に失礼な電話を再度致した事をお詫び致し故人の御冥福を祈ります。合掌

## 小西正宏君と僕

幸内義孝

彼との出会いは、夏山合宿のトレーニング、菊水山から摩耶山への重荷の折だったと思う。彼は、よく話す、楽しい青年であったという印象である。そして夏山。入部したのが遅かったので、彼は、縦走組となった。彼自身は、登攀隊に、入りたかったようだ。縦走コースは、彼は、一度通った所だったそうだから、あまり好まないコースのように、思えたかもしれない。僕自身は、行ったことのないコースを選び、山岳会らしいコースと思い、選んだつもりだった。

そして、いよいよ合宿 上高地→長堀尾根→蝶ヶ岳(泊) 彼は、よく動いてくれた。次の日は、遠いのだ。蝶ヶ岳→常念岳→大天井岳→西岳。大天井小屋で、西岳に水がないと初めてわかる。(リーダーとしてもっと調べるべきだった。)大天井小屋から、水を運ぶ。彼と僕とで、真暗になってしまったが、西岳に、テントを張る。その時の彼の印象が強い。テントを張って中へ入ると、小雨が降ってきた。その時であった。僕達は、ザックも靴も、テントの中へ入れたが、彼は、中へ入れようとしなない。「小西、ザック中へ入れろ」「僕は、ザックを、中へ入れない主義です。」と、答が返って

くる。変った奴だと思ったが、子供ではないからと思ひ、強く言わなかった。

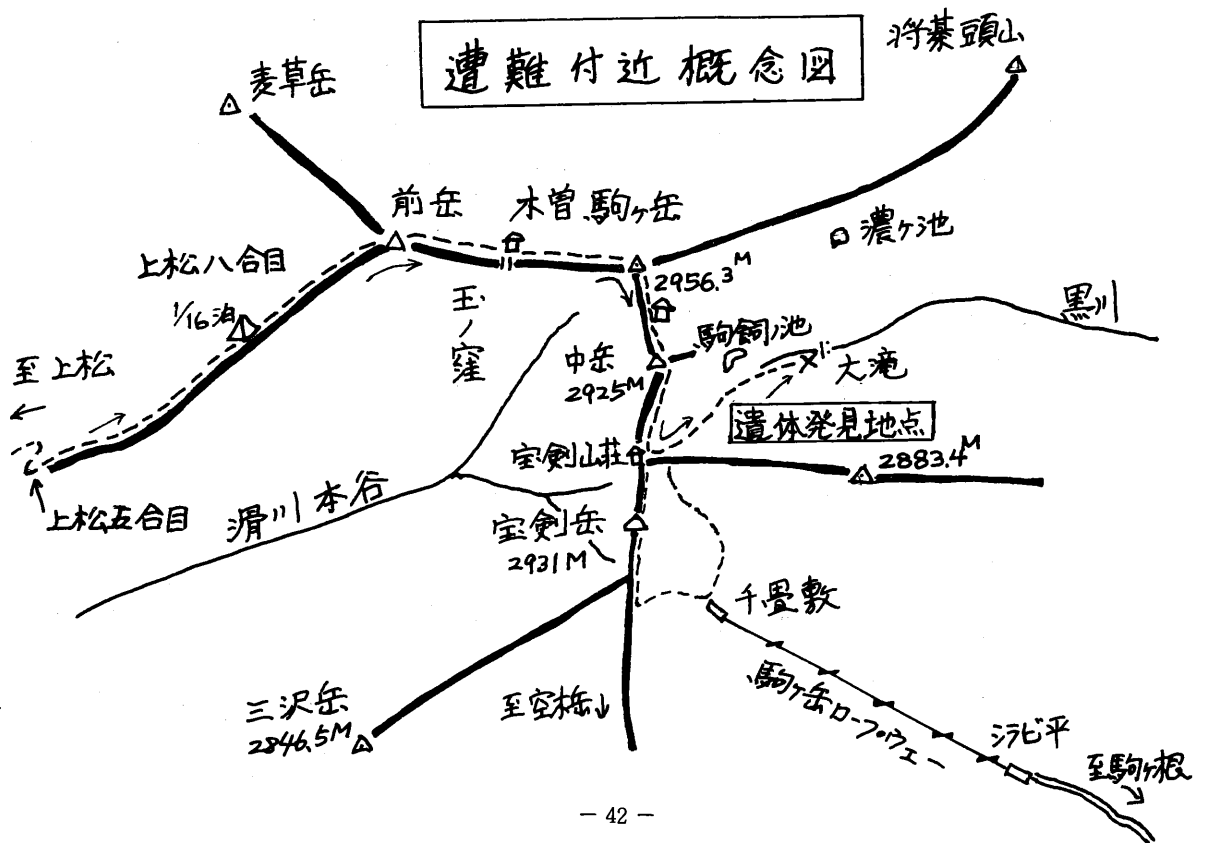
次の日 西岳→槍→南岳→北穂高岳→酒沢 南岳で彼は、クラブ以外の人と、楽しそうに話をしている。そんな彼である。僕は、そんなげいとうは、できない。陰気な性格なので、ちょっと羨ましく思う。キレット→北穂 彼は、皆とならんで歩かない。

今迄にも、再三ペースを、みんなに合せと、言ってきたのに、どうしても一緒に歩かないのでどうしてかと聞く。彼は、「今迄、単独とか、2人で行っていたから」と、答える。

その時、心にもっと、余裕をと思ったが、彼は、まだ若いのでと思ったので、隊と離れてもと思ひ、「後から 自分のペースでついて来い」と、言った。

今考えてみると、強制するべきだったかもしれない。そして、北穂、そこでも彼は、よく動いた。下山路を、捜しに行ってくれた。でも僕に、言ってくれなかったので、ちょっと腹が立った。そして、酒沢、登攀隊に迎えてもらひ、感謝感激だった。そして、その晩登攀隊に、紅茶、酒、めし等を、ごちそうになる。疲れ果てた彼女達も居たのに、彼はいない。聞くと、彼は、別のテントで、寝たと。我慢する所は、我慢するべきだと思ひました。

最後に、後で考えると、彼自身は、登攀隊に、加わりたかったのだろう。不本意な、山行に終わったのが、残念ではなかったろうか。でもそれはそれ、彼は、若いので「例会によく来て、来年こそはと思ってくれたらう」と、思ひました。



神戸山岳会・会報 No. 14

昭和57年10月発行

編集者 国沢・山本

発行者 神戸山岳会

神戸市灘区高德町5-3-1 内藤正司宅

印刷所 甲南出版社

神戸市中央区北長狭通4丁目私学会館内